

文面に浮かぶ敗軍の将の知られざる一面

ロジェストウェンスキー 司令長官の手紙

日本海海戦の完敗によって
敗軍の将となり、
バルチック艦隊壊滅の
責任を負うことになった
ロジェストウェンスキー司令長官。
バルト海から東洋への大航海の途上、
司令長官は家族宛に何通もの私信を
故国に発していた。
その文面からは、家族を想い、
自らの運命に苦悩する
ロジェストウェンスキー司令長官の
人間的な姿が浮かび上がってくる。



ロジェストウェンスキーの家族。左から孫のニコライ、夫人のオリガ、娘のリョーリヤ、孫のソフィア、娘婿のウラジミール。ロジェストウェンスキー死後の1915年頃に撮影されたものだという。

文—コスタチン・サルキソフ（山梨学院大学名誉教授／元ロシア外交アカデミー日本・北東アジアセンター長）
監修—平間洋一（元防衛大学校教授）

率直な心境が綴られる手紙

日露戦争は現代史の一つの山場として、百年以上を経た現在も、その起因、経緯と結果について多くの論文が発表され論争が続いている。過去を完全に復活するのは無理だが、運が良ければ「歴史」という大河に流された史実を釣り出して、歴史の「絵」に新しい線を描きたくなるのは歴史家の常である。

バルト海から日本海までの航海中、夫人宛に書いたバルチック艦隊司令長官ロジェストウェンスキーの私信はその史実の一つである。彼がこの手紙を書いたときには、後に公開されるとは予想もしていなかったであろう。そのため物事を美化したり、自分の行動を弁解したりすることはなく、大きなことから些細なことまで歴史の背後を描き、率直な、場合によって容赦なき自己批判も含め、司令長官の心の混乱を露呈している。大きな責任を負わされているロジェストウェンスキー司令長官ではあるが、彼はとても小さな、些細なことについて案じていた。

「ここ数時間は海は確実に穏やかになり、曇り気候が始まった。われわれは急いで石炭を積み込む。船は頭と頭がぶつかったり、ポートにあたりたり、英国の石炭運搬船の舷側と擦れたりしているが、最も恐れているのは、搭載に着手する前にまた暴風が吹き始めることである。搭載作業を中止して天候の回復を待たなければならない」

と航海の激しい状況を描く一方で、突然に、

「お前に面倒をかけるのだが、侍従武官服二着と白色の飾りのストライプが縫い付けてあるズボンを一本お前のところに送る。ちょうど今、ハンブルクに向かう船便があるので、それを使う。……ペテルブルク港税関からその荷物を受け取ったら、荷物受け取りに向いた参謀本部のクーリエにそのまま、プルンスト洋服店にそれを持っていくようお願いしなさい。クーリエには洋服屋に「追ってロジェストウェンスキー提督から連絡があるので、刺繍のやり方は決めず、しばらくこのまま保管しておいてほしい」と言うよう伝えな

さい。早めに直すと刺繍とボタンはうす黒くなるので。私のズボンの飾りストライプは金線二本（金糸の刺繍）が整理ダンスの中にあったのではないかと。面倒をかけてすまない。今回は何も書けない。私もいろいろ仕事に追われている。強くキスする。Z.R」

注：軍服専門の洋服屋V.V.プルンストはこの当時、最も有名な洋服屋の一人だった。ペテルブルクの大軍省からそう遠くないバリシヤヤ・マルスカヤ通りに既製服と注文服の両部門の店があった。

ロジェストウェンスキーの家族

ここに掲載する写真は日本で初めて公開される司令長官の家族の写真で、ロジェストウェンスキーの私信に頻りにでてくる顔ぶれである。この写真は2001年に山梨学院大学が実施した「日露戦争100周年」記念行事で、サンクトペテルブルグを訪問したときに、提督のひ孫に当たるジノビー・スペチンスキー氏からいただいたものである。いつ撮影したかを聞いたところ、はっきりしないが1915年頃とのことだった。だとすると、ロジェスト

ウェンスキー提督はすでに亡くなっている、この写真にはいない。

左から二番目、65歳ぐらゐの婦人は私信が送られた提督の夫人オリガ・ニコラエブナ。司令長官は愛妻家であったに違いないが、男前で女性にもてたので、嫉妬深いオリガ夫人から文句を浴びせられていた。ロジェストウェンスキー司令長官は次のように弁護したり、からかったりしている。

「愛するリョーリャ(夫人の愛称)。お前は、以前に私がお前を怒らせたことで、私は今になって多額のツケを払うことになる」と書いているね。喜んでツケは払うよ。でも、私はお前を怒らせることなど何もしないよ。だから、私はこれっぽっちも払わなくてよいのじゃないか。もしお前が私を怒らせたよりも、私がお前を怒らせた方が多いと認めるならば、私は喜んで支払う時が来るのを待っているよ」

などと書いている。厳しい状況の中で滅亡へ向かう「群れの牧師」のように、艦隊を指揮していた司令長官にとって、夫人の嫉妬が心理的に負担であったことが手紙から感じられる。

真ん中にいるのは提督の娘のリョーリャ(娘の愛称・夫人と同じ名前)。1904年10月にバルチック艦隊がレーベリを出航してから、提督がもっとも心配していたのは妊娠していた娘のことだった。

分娩はうまくいくのかどうか。11月27

日の手紙には、

「私にはわからないが、リョーリャの体調はどうかな。このあと私は、12月後半まで知ることができない。あと1か月もある。万事うまく行くと信じることにしよう。でも安穩としてはられない」

また、妊娠中の娘は夫の安否を心配していた。写真の右端に座っている軍服を着ている男性が娘婿のウラジーミル・スポーチンで、満洲の戦場に行っているが消息がない。司令長官は航海中クロバトキン満洲軍総司令長官の幕僚の知人に直接、問い合わせた。

「今日、9月20日、私は電報を受け取った。この電報は私が前線に発信した2週目の問い合わせであり、1回目の問い合わせ電報は満洲軍総司令部に宛てたためか、返事がなかった。今回の返電から判断すると、ウラジーミル・フォードロヴィチ(スポーチン)は現在、撫順にいる」

と、艦隊の出航準備に忙殺されながら提督はペテルブルグに残された夫人と娘を慰めている。

マダガスカルにたどり着き、やっと娘に男の子が生まれたとの通知があった。写真の左端の男の子がニコライ、女の子はソフィア(ともに孫)である。ロシア革命後、家族はヨーロッパに亡命し、職を探して南米に渡った。ニコライは亡くなるまでずっとアルゼンチンに住み着いていたが、ソフィアの家族は再びヨーロッパに戻り、

南フランスに定住した。60年代にソフィアの3人の子供(長女マリア、長男ジノビー、次女オリガ)がロシアに帰国した。この長男ジノビー氏のおかげで、家族が大事にしていたロジェストウェンスキー司令長官の私信を、日露戦争の歴史の1ページとして加えることが

できたのである。

晩年の ロジェストウェンスキー

ジノビー氏からは、もう一つの資料をいただいた。ロシア国立中央海軍古文書館に保管されている、1906年1月16日付ロジェストウェンスキー中將の軍役記録である。これを見ると、捕虜となり日本から帰国した提督は海軍参謀総長のポストに復帰している。この事実は日本海海戦のバルチック艦隊の敗北が司令長官の責任ではないとの当時の評価のように思われる。捕虜のときにも、ペテルブルグに帰ってからも、ロジェストウェンスキー司令長官はロシア海軍の復活や改革に精力的に取り組んでいた。

「ロジェストウェンスキー提督は12月1日(旧暦)にペテルブルグに到着、海軍総司令官、以前の職務に復帰した。提督の帰国とともにロシア海軍の改革と復興が始まる」と、ロシアの有力紙「ルスコエ・スローボ」(1905年11月10日付)が報道している。また、1906年5月18日、同じ新聞は「ロジェストウェンスキー委員会が計画した特別訓練計画に基づき、黒海艦隊が実弾射撃のため出港した」とも報じていた。

しかし、そのときにはロジェストウェンスキー提督は退官届けを出していた。マスコミが中將の敗戦責任の追及をはじめたのである。その背景にはロシアの内乱、政府当局に対する批判の沸騰があった。1906年3月8日付のある知り合いへ書いた手紙に、提督はロシアの新聞などによる彼の名声を傷つける報道に苦々しげに言及している。また、バルチック艦隊の旅順への遠征航海は本来間違いであった。

「もし私に勇気があったならば、残余の海軍兵力を守ってくれ、滅亡のためによこさないでくれ、と呼ばなければならなかったが、その勇気がなかった」

と反省している。

彼の責任を厳しく追及した「ルスコエ・スローボ」紙は1909年1月3日に次のように報じた。

「ロジェストウェンスキー退役提督は元日早朝、貧しく年金しか生活費のないオリガ・ニコラエブナ夫人を残して世を去られた……ゲイデン伯爵が皇帝皇后の指示により提督の棺に花束を捧げた」



ロジェストウェンスキーの軍役記録。後世の評価からすると意外な気もするが、海軍参謀総長のポストに復帰し、少なくとも戦争終結後は日本海海戦敗戦の責を負わされてはいなかったことがわかる。